フィヒテの宗教哲學の發展

朝永三十郎

八

無神論々爭に於けるフィヒテの宗教哲學上の思想をば(一)宗教哲學の課題(二)宗教的信仰の確實性(三)宗教的信仰の對象の三項に別つて叙説したが、第二項に就ては此期の思想を以て最終的に確定したものと見て差支ないと思ふ。即ち以後の思想の變遷の叙説に於て此一項は絶えず其背景として豫想されて居ると見られねばならぬ。伯林期に入つて專ら變化を受けたのは第三項即ち宗教的信仰の對象に就ての思想であつて、而してフィヒテは此項に就て宗教的信仰に具體的内容を與へんと力めたことゝ關聯して、第一項に就て無神論々爭期に嚴密に劃いた批判的限界を次第に踰越するに至つた。

「理神論短句集」に於ては「頭腦と心胸との乖離」は神性論及び人性論上の決定論と非決定論との對立といふ形を以て現はれて居る。頭腦は神人共に絶對的に決定せら

れて居るといふことを要求するに反して、心胸は一方に於ては祈禱に聽き、理法を左右して特別の恩寵を降し得るところの神、他方に於ては人間の意志の自由を要求する。而して此乖離は「短句集」に於ては融解せられずに了り、カント哲學の採用に依て初めて、一旦融解せられた。無神論々爭に關する諸論文に於ては「頭腦と心胸との乖離」は道德的世界秩序の存否といふ形を取つて居る。知は道德的世界秩序の存在を示ことは出來ぬ。而かも信は之を要求する。而して此乖離は、一切の知は信に根柢を有するといふ洞觀に依て克服された。「人間の本分」に於てフィヒテは、一方從來の書き物に現はれた思想を總括整序すると共に、他方、更に之を發展せんとしたが、其結果として「頭腦と心胸との乖離」は此處には二重の形を取つて現はれて居る。第一に其れは「自然體系」Natursystem と「自由體系」Freiheitssystem との對立である。悟性は外的經驗の事實より出發して嚴密なる推理に基いて「自然體系」を與へる。斯くて「自然體系」は悟性を滿足させるが、併し自然をば唯一の實在と見、吾々の叡智をば唯の自然の發現、吾々の思惟をば唯の傍觀、吾々の意志をば自然力の唯の機械的結果と見、吾々の自主と自由とを否定する。其結果として人間は唯々所定のもの(bloss bestimmt)となつて、能定に基くところの本分(Bestimmung)を有するといふことは出來ぬ。此「自然體系」

に對して直接感情の要求に根柢を有する「自由體系」が成立つが、併し其れは感情に滿足を與へる代りに其れだけでは悟性に基く「自然體系」の權威を動かすに足らぬ。双方共に夫れ夫れの理由はあるが、反對を否定し盡す力を有せざるが故に双方共に又た確實性に缺くるところがある。是に於て吾々は深き「疑惑」と「不安」とに沈まざるを得ぬ。而して此疑惑と不安とよりして吾々を救護するものはフィヒテに依れば「知識學」である。

「自然體系」は悟性の嚴密なる推理の上に立ち、而して其推理其者には誤謬はないから、之を否定し得るや否やを考査せんが爲めには其出發其者、其根本前提其者の檢覈に依る外はない。即ち此體系の出發點となつて居るところの外的經驗の事實其者が何の基礎の上に立つかといふことを問題とする外はない。前には吾々は經驗の中に吾々の立場を取つて此處よりして嚴密なる推理に依て「自然體系」を組立てゝ行つたが、今は經驗をば立場の前に置き、一段高き處よりして經驗を眺めて見ねばならぬ。言換ふれば、前には吾々を離れた自然、即ち自然自體が對象であつたが、今は吾々の自然の表象、或は經驗の事實を對象としなければならぬ。即ち吾々は獨斷的立場を棄てゝ「知識學」の課題に入らねばならぬ。而して「知識學」によれば、經驗の事實は「我」

の無意識必然的行動の所產である。斯くて吾々の自由を壓迫した自然の實在は否定せられて吾々の意識の唯の表象又は影像となる。併し純粹の知識作用 Wissen のみに依る間は吾々は此表象を超越することは出來ぬ。卽ち之に依て吾々の我の實在は確實を失なひ、自己意識も唯の夢象(トラウムビルド)と化し、斯くて世は擧つて迷妄となり了つて人生は再び眞面目なる意義と價値とを失なひ、眞誠の意味に於ける人間の本分の成立の餘地はなくなる。卽ち頭腦と心胸との乖離は再び新たなる形を取て表はるゝ。此乖離よりして吾々を救護するものはフィヒテに依れば信仰である。フィヒテに依れば知識作用は畢竟破邪の具のみ。「そは誤謬を破壞し絕滅する。そは吾々に眞理を與ふる能はず、何となればそは其自身に於ては全然空なるが故に」。(S. W., II., S. 249.) 但し玆に所謂信仰は知識に並立のものでなくして其眞の根柢をなすものであるといふ前期の思想が背景にあることを忘れてはならぬ。(S. W., II., S. 253f., 255.) 斯くて「知識論」Wissenslehre は「信仰論」Glaubenslehre に移り行かねばならぬ。或は前者の破邪の業によりて開拓されたる地盤に後者の建設の業が加へられねばならぬ。

フィヒテは斯くしてカント及び自己の前期の實踐理性の要想卽ち義務意識に基いた實在の信仰 (Realitätsglauben aus Pflicht) をば更に發展擴張して順次に理性的生類及

び感覺界、超感界或は超現世界、及び神の存在を確認せんとした。

理性的生類及感覺界の實在　良心が道德的に行動せよと予に命ずると同時に予は予、他の人格、及び感覺界の實在を信ぜざるを得ぬ。若し他の人間が予を離れて存ずる人格に非ずして單に予の想像の投射に過ぎずとせば、彼等をば其自身目的を有する獨立の生類として取扱へといふ義務は全然無意味となる。其故に彼等は予を離れて實存する人格でなければならぬ。卽ち知に依ては唯の表象以上に出で得なかつた他の人間は良心に依て實在化されるのである。他の人間が獨立自存の實在であるといふ信仰は吾々の權利の感情 Rechtsgefühl の根柢に已に存じて居る。吾々が他人よりして自己の自由を尊敬することを權利として要求することの反面には、自己が唯の表象に非ずして獨立自存の人格なること、其他人が自己の自由を尊敬し又は毀損する能力を有すること、從つて彼等も亦た唯の表象に非ずして獨立自存の人格なることを豫想して居る。如何に極端なる、一切の物、而して己れ自らまでも唯の表象に過ぎずと考へるところの觀念論者と雖も、他人よりして唯の表象として取扱はるゝこと、他人が無法に自己の存在に干涉することを欲する者はあるまい。卽ち彼と雖も自己及び他人の双方をば表象と見ずして實在と信じて居るのである。

良心は又た予に物質的欲望を適度に充たすことに依て義務遂行の機關たる吾々の肉體を健全にせよと命ずる。又た、他の人も亦た自己と同樣の欲望と義務とを有するが故に、自己と同樣の權利を之に讓歩し、其肉體的生命、財産等を尊重せよと命ずる。併し若し肉體、物質的欲望の對象としての衣食住等が唯の表象に過ぎずとせば是等の義務は全然無意味である。其故に是等は實在せねばならぬ。卽ち良心は人格以外の感覺界の表象を實在化する。若し吾々が單に知のみであるならば一切は唯表象のみであらう。併し吾々は行的である。從つて此行動の爲めに一定の舞臺を承認せざるを得ぬ。感覺界は卽ち此舞臺である。但しそは唯々吾々の行動の舞臺である。現實の世界の意識は行動に對する要求より起るのであつて、決して其反對に世界の意識よりして行動の要求が起るのではない。本源的なものは行動の要求であつて、世界の意識は之より派生されたものである。吾々は認識するが故に行動するに非ずして、行動せざるべからざるが故に認識するのである。直接に確實なるものは行動の法則であつて、世界の實在は唯此確實を通じて確實であるに過ぎぬ。(S. W., II. S. 363.) 斯くて信仰は吾々に自己、他の人格、此人格間の相制又は交渉、此交渉の媒介物としての感覺界の實在を確保した。併し信仰は更に一歩を進めて吾々に

超感界、起現世界の實在を確保する。

超現世界 überirdische Welt の實在　道德的行動は一定の目的を立て此現世界を舞臺として其の上に一定の狀態を將來に實現せんと欲する、或は道德的目的の指示する方向に此現世界を改造或は改善せんと欲する。卽ち道德的行動は此現實の世界は改善を要する、而して此行動に依て改善され得るといふ確信の上に成立つ。是に於て、例へば未開の邦土に文化を傳へ、文明の邦土に於ても外に對しては戰爭を停止し內に於ては正義を擁護增進して、一切人類をして平和の裡に人文の進步の爲めに協力せしむるといふが如き、現世界の缺陷 Weltmangel に應じたる種々の現世的任務 Weltaufgabe がある。併し是等の現世的世界目的 irdischer Weltzweck を實現せんとする心術 Gesinnung 又は意志は吾々の自由の領域に屬するが、感覺界に於ける其實現其者は其領域以外である。志向其者は道德的に純良であつても實際の效果は擧らず、或は最善良なる改善の意志が却て世界の改惡を持來すことすらある。或は之と正反對に、例へば私利と私利互に衝突して彼我共に滅亡し、其結果おのづから改善の餘地が開けるといふ場合の如く、不正や罪惡が却て世界改善の誘因となることもある。「物質的因果の連鎖を追ふて進行する……ところの感覺界に於ては如何にして、如何

なる志向と心術とを以て或行動がなされたかといふことは問題ではない、唯其行動が何であるかといふことが問題である。」(S.W.,II.,S.288.) 斯の如く現世的世界目的は唯外的行動の機械作用のみに依て達せらるゝことが出來て、必ずしも其行動の內面にある心術又は道德的志向には依存しない。

斯くて、若し單に人類の現世的狀態の改善といふことが唯一の吾々の目的であるならば、吾々の心術は必ずしも必要でない「之に要するものは唯吾々の外的行動を決定するところの誤なき機械作用のみであつて、吾々は唯其機械によく適合した一の齒車であれば充分であり」(S. W.,II.,S.281.)內界に於ける自由と道德法とは冗物である。從つて若し吾々の自由が唯の空なる表象であり道德法が冗物にすぎずといふことが不可能なる以上は、此自由なくして唯の機械作用のみで到達され得る現世的世界目的が終極目的であり、此現世界が唯一の實在であることは出來ぬ。吾々の內界には、此現世的生活には何等の用をもなさない、例へば最高き現世的目的に對してすら尙ほ贅物なるを免れない或ものがある。從つて吾々は此現世的世界目的を超越した或目的、現世界を超越した超現世界を認めざるを得ない。予は絕對的に、無制約的に、義務の法則に服從せねばならぬ。併し予は理性的生類として動機なく目的なし

に行動すこるとは出來ぬ。「若し予が此服從をば理性的として承認し得べしとせば、若し予に此服從を命ずるところのものが單に自己の空想に基いた若くば他より投げ與へられた妄信でなくして、眞に予の本質たる理性であるとすれば、此服從は何等かの效果を有せねばならぬ、何等かの目的の爲めに役立たねばならぬ。其れが感覺界の目的の爲めに役立たぬといふことは明白である。從つて超感界がありて、其れは此超感界の目的の爲めに役立たねばならぬ。」(S.W.,II.S.281.) 斯くて、道德法は超現世界の實在を要求し、其表象を實在化する。此超現世界に於て效果を有するものは、必然的の因果連鎖を形造つて居る物質運動中の一員たる業(わざ) Tat でなくして唯、絕對的の自由行動たる意志、一切の因果關係より獨立な純粹の心術のみでなければならぬ。感覺界又は現世界を支配するものは業であるか、理性界又は超現世界を支配するものは心術である。

然らば此兩界の關係は如何になつて居るか。吾々は絕對的に自由であると共に感性的である、卽ち現世及超現世、或は地天兩界に跨つて生活して居る。吾々は此兩界を區別して、感覺界及び超感界、時間の世界及び永遠の世界、現世界及び超現世界等の名稱を以て之を言表はすが、併し兩者の關係は決して前者が終つて初めて後者が

始まるといふに非ずして、双方共に本來吾々の内にある。吾々の業は感覺界に屬し、吾々の心術(結果を顧慮せざる、純粹に義務意識より起つた意志)は超感界に屬する。此心術に依て吾々は此超感界に住する。「吾々が天國と呼ぶものは墓の彼方にあるのではない。此土に於て已に吾々の四圍に擴げられ、其光明は凡ての純なる心の内に現はれ來る。予の意志は予自身のものである、而して全然予自身のものであり全然予自身に依存する唯一のものである、而して此意志に依て予は今既に、自由と純粹の理性活動の王國の一市民である。」(S.W.,II.,S.203.)「予は、理性の法則に服從せんと決意するや否や、不死、不滅、永遠である、はじめて其れになる必要はない。超感の世界は未來の世界ではない、今現在する……」(S.W.,II.,S.289.)來世は存在して、吾々の時間的感性的存在は其處では現在とは異なつた形を取るかも知れないが、併し其等は眞の生活ならざる點に於て毫も現在と異なることはない。無制約の義務の命に服從することに依て吾々は永遠の生活に入り、單に此生活のみならず次で來るべき他の一切の感性的生活を高く超越する。(S.W.,II.,S.289.)

吾々の心術、意志は感覺界に現はるゝ效果の如何に拘泥してはならぬ、全然成敗を超脱せねばならぬ。若し一毫にも成敗に依て左右さるゝならば其れは超感界の一

員たるべき資格を失ふ。無論吾々が自己の道德意志をば感覺界に於ける運動因として見るときには吾々は之をば現世的世界目的に關係せしめざるを得ないのであるが、併し其れは決して先づ感覺界の成行を計量し事の成敗を考慮して之に依て何を爲すべきかを決定するといふのではなく、一定の行動が吾々が今の位置に於て此現世的目的の實現の爲めに貢獻し得べき唯一のことであるといふことが全然成敗の考慮を離れて直接に吾々の心中に浮び來るのである。たとへ其事が失敗に歸した、或は却て豫期に反對の結果を生じて現世的目的の實現を妨碍したといふことが後に明かになつたとしても、心術にして純誠なる以上はそは一毫も吾々をして後悔せしめることも當惑せしめることも出來ない。其意志は此現實界に於て如何なる結果を持來さうとも、超現實界に於ては善き效果以外に之よりして生起することは出來ない。要するに吾々が現世的目的を追求するは其自身の爲め或は終局目的としてゞはなく、唯吾々の眞の終局目的たる良心に對する服從が此現實界に於ては此現世的世界善の增進といふ形を以ての外現はるゝことが出來ないからである。吾々は義務の法則を否定し得ざる以上は、若くば此法則が現世に於て已に、此現實的目的を增進せよといふ命令以外の他の形を以て現はれざる以上は、此現實的目的の追

求を休止することは出來ぬ。吾々は此世界善を增進せんと意志せざるを得ぬ。唯、其れが其意志より起る業に依て現實に增進さるゝや否やは問題ではない吾々が責任を有するは唯意志のみ結果に對しては予は毫も責任を有せぬといふのである。

神の實在　斯くて吾々は善良の意志は無效果でない、必ず結果を有するといふ確信を有する。卽ち善良の意志をば必然的に其結果と結付けるところの法則を信ずる。併し吾々自身此法則たることは出來ぬ。何となれば、吾々の自由領域、其れが自由に左右し得るものは唯心術のみ、此領域內に於ては吾々は絕對的に自由であるが、併し一歩之を出づれば全然無力である。併し其れにも拘らず吾々は其心術に依て自己以外の世界に對絕的に效果を有すると確信する以上は、吾々以外に、原因たる吾々の意志と其結果とを結付けるところのものがあるとせねばならぬ。併し意志をして原因たらしめ得るもの、意志に働き得るものは唯意志のみ、而して有限的意志は自己以外の世界に働くことは出來ないから、かの法則は無限的意志の外にはあり得ない。吾々の意志をして永遠の效果を有せしむるところの法則、道德的世界秩序は斯の如き無限意志の根柢の上に初めて成立つことが出來る。吾々が義務に合致するやうに意志すること、良心の命令に服從することは全然吾々自身の仕事であるが、

併し此意志をして道德的世界秩序の一員たらしめることは無限的意志の力初めて之をよくする。吾々と超感界との連帶たり仲介者たるものは此無限意志である。斯くて、吾々の有限意志を超越して而かも其内に顯現するところの神の存在が確實となる。

知は吾々に一般に實在を示すことは出來ぬ、感覺的對象も超感的對象も其實在を示すものは信である、とする點に於てフィヒテはヤコービと全然一致する。フィヒテ自身も明白に此一致を認め、且つヤコービをばカントと並んで「同時に出た哲學の革新者」と稱揚して居る。併し兩家の間に根本的の相違があることを看過してはならぬ。ヤコービの所謂信は理論的であり、フィヒテの其れは無神論々爭期に於て其確定性が論定されたる實踐的信仰である。

是に於てフィヒテが今まで良心の要求より出發して一歩一歩別々に肯定し來つた感覺界、多數人格、超感界等の信仰は統一ある基礎の上に立ち體系的に結付けらるゝに至つた。良心は予及び予と同類の多數の心靈(Geister)を實在化した。併し是等の互に獨立したる多數心靈間の相制作用、如何にして彼等は互に思想感情を交換し、互に動かし動かされ、協同調和して人類なる一の種(ガットウング)を形造り得るかは尙ほ疑問として

殘されて居る。今、是等多數の心靈は各自一無限意志に依て超感界に結付けられて居る。從つて又た相互に結付けられて居る。多數心靈の相制作用は彼等が其感情、直覺、思惟法則に於て相契合し一樣の仕方を以て共同の感覺界を表象し之を仲介とすることに依て初めて可能である。而して多數心靈をば斯る仕方を以て表象する樣に制限するものは無限意志である。純粹なる知の哲學によれば、吾々凡てが同一の感覺界を見るといふことは、感情、直覺、思惟法則に就ての契合に依存する、此契合は多數の有限的の理性的生類の契合した制限 übereinstimmende Beschränkung であつて、吾々多數が一の種となり得るは此契合した制限に基く。併し此契合其者は知の哲學に對しては全然不可解である。然るに信は更に一歩を進める。「……自ら理性であるものゝ外に理性を制限し得るものあるか。而して無限理性の外に一切の有限的理性を制限するものあるか。—此契合は一の永遠なる無限意志の結果である」。(S.W.,II., 302.)

一見すれば此神觀は神の人格性を絶對的に排斥した前期の思想に矛盾する樣であるが、併しフィヒテは此處に於ても亦た前期同樣信仰の直接性を忠實に固持して明確に哲學上並に神學上の獨斷的人格神觀に反對して居る。神に吾々の限られたる

意識や人格を歸するは今のフィヒテに取ても尙ほ其無限性に矛盾することであつて、そは神を神たらしめずして唯偉人たらしむるものに過ぎぬ。獨斷的の人格神觀は「汝(神)に就て唯聞きしのみにて嘗て汝を見しことなき詮索好きの悟性」が「汝の本質自體を吾々に敎へんと欲して汝の肖像として示す矛盾だらけの怪物であつて、才智ある者に取ては笑ふべく賢明にして善良なる者に取ては不快にして憎むべきものである」。(S. W., II., 304) 神其者は飽くまでも不可思議である、又た吾々は之を知るを要せぬ。併し彼れが吾々に對する關係は、道德律の力に依て一度超感的生活に入つた者に取ては一點の疑も止めず明かである。彼れは吾々に働いて義務、本分の認識を起す。其如何にしてかは吾々は知ることは出來ぬ、又た知ることを要せぬ。彼は吾々が思惟し意志するところのことを知り且つ認識する。彼が如何にして之を知るかは知ることは出來ぬ、又た知ることを要せぬ。要するに吾々は吾々の內に於ける彼れの顯現に依て彼を知るのであつて、彼自身が如何なるものであるか、如何にして顯現するかは到底不可思議である。

汎神論的世界觀　斯くて神其者が全然不可思議の世界に隱さるゝと共に信ぜられたる神の實在 geglaubte Realität Gottes は直接に內的に體驗される神の實在 unmittelbar

im Innern erlebte Realität Gottes となり、之と伴つて前期に於ける倫理的な義務の信仰を核心とした「歡喜精進の宗教」Religion des freudigen Rechttuns は神秘的の體驗及觀照を核心とした、汎神論的、神秘的、宗教的世界觀に依て補充された。「眞に實在する物は理性のみ、無限理性は其自身に、有限理性は無限理性の內に、無限理性に依て存在する。神は吾々の精神に於て初めて世界、少くとも吾々が世界を發展するところのもの卽ち義務の命令、共同の感情、直覺、思惟法則等を創造する。吾々は彼れの光明を通じて光明を見、此光明の裡に吾々に現はるゝ一切を見る。」(S.W.,II,S.303.)「一切の吾々の生命は彼れの生命である。吾々は彼れの手の裡にあり、而して永久其裡にあり、何者も其處より吾々を引離すことは出來ぬ。彼は永遠なるが故に吾々も亦た永遠である。」(S.W.,II,S.303)「汝(無限意志)の聲は予の內に響き、予のは復た汝の內に響く。而して予の一切の思惟は若し其れが眞にして善なる限り汝の內に思惟せらるゝ。汝不可解なる者の內に於て、予は自らに、世界は予に完全に可解となる、一切の予の存在の謎は解かれ、而して完全なる調和が予の心の內に成立つ。」(S. W., II, S. 304) 萬有は彼れの內に在り。全世界は神の生命の流れ出でゝある。「斯くて予の心胸が現世的なるものに對する一切の欲望に閉ぢられ、予が無常なるものに對して眞に毫末の執着をも有

せざるに至るならば、世界は榮ある姿を以て予の眼に現はれる。唯空間を塡充するのみなる死せる重苦しき物質界は消うせて之に代つて生命と力と業との永遠の流れが一切の生命の淵源よりして波を揚げ音を立てつゝ流れ出でる。汝の生命よりして、無限なる者よ。何となれば一切の生命は汝の生命である、而して唯宗教的の眼のみが眞の美の國に徹するが故に。予は汝に密接に結付けられ、而して予が予の周圍に見る一切の物は予に密接に結付けらるゝ。一切は生と靈とを有し輝いたる靈の眼を以て予を眺め靈の聲を以て予の胸に話す。」(S.W.,II,S.315.) 神の生命は「予を通じて無限の全自然に流れ落ちる。此處では、其れは、自らを創造し形造るところの物質として予の血管筋肉を通じて流れ、其滿ち溢れたる餘澤を樹、植物、草に灌ぐ。(S.W., II.,S.316.) 斯くて萬有は神の生命の流れ出でとして悉く善の爲めに計畫され、悉く合目的であるといふ結論が當然出で來らねばならぬ。「丁度是等の義務が吾々に課せらるゝといふことが吾々の道德的教化、吾々全人類の教化の永遠なる意匠の爲でなかつたならば、それは吾々に課せられなかつたであらう。而して其れが依て課せらるゝ所以のもの、卽ち吾々が惡と呼ぶところのものは全然起らなかつたであらう。此限りに於て一切萬有は善であり、絕對的に合目的である。唯一の世界、徹頭徹尾善

なる世界のみが可能である。」(S.W.,II,S.307.)「……併し予は知る、予は其計畫を完全に洞觀し實行するところの至上の智慧と善との世界に住する、而して予は此確信に安住し、而して淨福である。」(S.W.,II,S.313.)

是等の語句の中に吾々は明かに前期の精進の宗教を超越した、シュライエルマッヘルと同樣の一種の安住的、靜觀的、神秘的の人生及世界觀が鮮かに認めらるゝが、併し吾々は此世界觀の背景には常に本來の倫理主義が潛んで居るといふことを忘れてはならぬ。吾々が其れに依憑することに依て安泰と祥福とを得るところの神は道德的意志と超感者との仲介者、吾々の道德的意志をして超感界に效果を有せしむる意志である。吾々の心眼の曇は「義務の信仰に依て、無制約なる良心の命に聽いて、其心胸を「現世的なるものに對する一切の欲望に閉」づることに依つて、或は「世に死する」der Welt absterben ことに依て初めて拭拂はれる。而して此曇なき心眼の內に初めて此の如き世界の眞相は映じ來る。前期の所謂「歡喜精進の宗教」を通じて初めて斯の如き世界は眼前に展開し來り、當爲を超脫したる淨福の生活が實現され得る。此點に於てフィヒテの「人間の本分」に現はれたる宗教的世界觀は、結果に於てはシュライエルマッヘルの「宗教論」の其れと著しき類緣を有するに拘らず、其基礎と其處に到るまでの道行

に於て著しき相違がある。卽ちフィヒテの此汎神論的、最善觀的世界觀の宗敎は前期の歡喜精進の宗敎に代つたのではなくして之を補充したもの、或は此を發展することに依て完成せんとしたものである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吾々は「人間の本分」に於ける思想の開展とカント前の今世純理論的形而上學の發展との間に不思議なほど著しき並行を認める事が出來るが、而かも其間に先行思想家に對するフィヒテの特色も亦た鮮かに看取される。今此叙說を以て此書に於けるフィヒテの宗敎哲學思想の要約に代へ得ると思ふ。「人間の本分」第一卷の獨話體叙說法がデカートの「默想錄」の其れに酷似し、且つ兩書共に一切の實在に對する根本的懷疑を以て出發し而して共に自己確實を以て他の一切の確實の根柢とするといふ二點は、兩者を比較する何人も見のがし得ないことであるが、併し更に此懷疑の融解法に於て亦た兩者の間に顯著なる契合と興味ある對照とがある。フィヒテに依れば、良心は吾々の內に於ける神の聲、實踐的の神の觀念であつて、吾々は唯其れに依てのみ自己及び自己以外の事物の實在を確認し得る。デカルトの場合に於ても亦た實在を確保するものは神の觀念であつた。唯其神の觀念は實踐的でなくして純理論的

あつた。フィヒテに依れば吾々は唯々神に於て、神に依てのみ、吾々が夢の世界に住せずして、現實なる、一切の理性的生類に共同なる世界に住して居るといふことを確信し得る。「彼神は多數神靈の連帶である。」「吾々は神の内に物を見る。」これはマルブランシがデカートの徹底的發展の結果として說いたことであるが、それは又た其儘フィヒテが自己の思想の徹底的發展の結果として說いた語である。併し吾々の感覺界の實在、世界の表象に於ける一切の理性的生類の契合、而して更に吾々自身までも神其者の内に根柢を有するとすれば、神の外には一物もない、吾々の生命は彼れの生命である、神は一切の内に於ける一切、永遠なる世界秩序其者であると言はねばならぬ。斯くてデカート、マルブランの神の觀念はスピノーザの神觀、汎神論的世界觀に發展したが、フィヒテの神の觀念も亦全然同樣の逕路を取て發展した。フィヒテが伯林期に於てスピノーザに近いたと稱せらるゝ重要點の一はこれである、唯スピノーザが永遠の秩序を自然論的に考へ、フィヒテは之を道德的に考へた點に顯著なる對照がある。尙ほ又た兩者は、吾々は有限無常の感覺界に死することに依て此永遠の秩序を認得し且つ之に生き得るとなす點に於ても合致する。更に、フィヒテに依れば、若し此世界が神の意志に基くとすればそれは徹頭徹尾善にして圓滿でなければなら

ぬ。吾々が惡と稱するものも畢竟善の爲めの必然の手段である。此思想は全然ライプニッツの辨神論と一致する。斯くてフィヒテはカント哲學より出發して而かもカントが批判期に入つて最嫌惡したと傳へらるゝライプニッツ流の辨神論と最善觀とに到達したのであるが、併し其辨神論と最善觀とはライプニッツとは全然基礎を異にして居る。此神的世界秩序を認得するものはライプニッツの場合に於ては理論的認識であつたがフィヒテの場合には信仰又は良心である。此點に於てフィヒテは獨斷哲學と絶緣して全然カントと一致する。併し此信仰は知に對立したものでなくして一切の知の根柢、一切の眞理の淵源、隨て一切の確實中の最確實なるものである。此點に於てフィヒテはカントの「實踐理性の優位」を發展して之を超越したるものである。卽ち無神論々爭期に於ては「先驗論理學」と「實踐理性の優位」とを平等に活用して其範圍に於て宗教的要求を充たさんとして神を道德的宇宙秩序と同視して形而上學に入ることを避けて居たフィヒテは、今は一度確定した實踐理性の至上權によつて徐々此批判的限界を踰越して形而上學的世界觀に入り其結果に於てはカント前の獨斷的形而上學と酷似して而かも全然其根柢を異にする立場に到達したのである。

此處の並行の事實の叙說は大體クーノー・フィッシャー(Gesch. d. neuer. Philos., S.562)による。唯その

事實の利用の仕方は之に拘束されて居らぬ。

九

フィヒテが全然宗教觀開陳の爲めに公にした纏まつた著作は「淨福生活の指南」であつて、此書に於て彼は己れが眞の宗教的の人生及世界觀と認めたものと諸他の人世及世界觀とを對照し、後者に對する前者の位置及關係、並に後者相互の關係を明確にすることに依て前者其者の特徴を明確にせんとして居る。而して後者の內には彼自身の前期の立場をも含んで居るから、此書は頓て彼自身の今までの漸次的發展の總決算であるとも見られ得る。併し此書に於ける彼れの世界觀の主要點は大部は已に「人間の本分」中に萠芽又は不整頓の形を以て含まれて居るのであつて、「淨福生活の指南」の重要部は大體上之をば更に整頓し明確にし發展したものである。其故に思想の發展を見る上より言へば「人間の本分」は最重要な位置にあると思ふ。一度此書に於て信仰の名に於て批判的限界が越えられ、形而上學世界觀の爲めに餘地が開かれ、汎神論的世界觀が成立つた以上、「淨福生活の指南」の思想は大部は其れの極めて自然的な發展の結果であると言へると思ふ。此兩書の間に立つて此發展の橋渡し

をなすものは「現代の特徴」である。

「現代の特徴」は第一に次第に定言命令の神化(アポテオーシス)を核心とした倫理主義的宗教觀を脱しつゝあつた前著の後を承けて初めて斷然と定言命令の道德が人心終局の要求を充たすに足らぬことを明說した。フィヒテは此書に於て啓蒙的の現代を批評して、一切の證權より解放された結果其れと共に政治、道德、宗教、哲學等諸方面に亘つて思想上幷に生活上一切の理性的、理想的の要素を放棄し了つたといふ故を以て、之をば「徹頭徹尾罪惡の時代」と呼んで居るが、殊に宗教上の皮想的なる所謂自由思想に對して峻酷なる批評を下した。而してフィヒテに依れば此皮想的な啓蒙思想に對して慊らざる人心の空虛を充たさんが爲めに出でたのが定言命令の倫理である。斯くて崇高にして男性的な此教は一時は啓蒙期の缺陷を充たして多くの剛健なる精神を引きつけたのであるが、併しそれは偶以て、其れに密接なる類緣を有する、而して啓蒙思想の爲めに壓迫されて居た永遠者に對する憧憬を呼醒することに依て人心をして更に之に對する切實なる不滿を感ぜしめて居る。斯くてフィヒテに依れば現代の最切實に要求するものは「眞の宗教」である。卽ち此「我」の哲學者は茲に「現代の特徴」を假りて「シュール・プフォールタ」以來の自己の思想上の經驗と變遷とを談つて居るのである。

斯くて此書に於て彼は前著の所說中に已に含まれて居つて而かも尙ほ明說されて居なかつた眞の宗敎と純粹の道德との區別及關係を明確にした。道德的の人は唯々良心の聲なるの故を以て義務の命に從ふ。併し其れが如何なる淵源を有するかを知らぬ。宗敎的の人に取ては義務は無限的生命の發展の生きたる法則であつて、已に普通の意味に於ける義務卽ち唯の命令ではない、彼は命ぜられて意志するに非ずして命に先つて意志する、卽ち其以外に意志することは出來ぬ。道德に對して一切の外的法則が消失するが如く、宗敎に對しては一切の內的法則も亦た消失する。道德的生活は純粹に當爲の生活であるが、宗敎は此當爲をば全然必然(Müssen)化する。(S.W., VII, S.231) 卽ち此處に「淨福生活の指南」に於ける五つの立場(後出)中の道德の立場と高級道德及び宗敎の立場との區別が明確にされ、而かも後の兩者は未だ明確に區別されて居ない。斯くて宗敎に於ては吾々の心內に於ける立法者の聲は全然沈默して感性對超感性の乖離 sinnlich-übersinnliche Zwiespalt は全然休熄する。此狀態が卽ち淨福の生活である。卽ちフィヒテはカントの嚴肅說より出發して、シルレルの美魂說と同一の方向に之を改修して遂に全然之を超脫するに至つたのである。但しシルレルの美魂は美的狀態に於て實現さるゝものであるが、フィヒテの淨福の生活は

道德的修練の結果にして其極致である。即ち一度當爲の生活を經て其修練に依て當爲を超脱したものである。即ち此點に於て出發點に於ける倫理主義は尙ほ缺くべからざる背景として殘つて居る。「……人は宗教に到達する前に必ず先づ純粹の道德を通過せねばならぬ。何となれば宗教は神の生命と意志とに對する愛であるが、併し不快を忍んで此意志を實行するものは決して神意を愛することは出來ぬからである。道德に依て吾々は初めて從順の習慣を養ふ、而してかく練習されたる從順の中に其美はしき果報として愛が起る。」(S.W.,VII,S.236) 彼れの宗教が到達點に於てシュライエルマッヘルの其れと大なる類緣を有しながら其根柢、其背景に於て之と反對の性質を有することは此處に於て一層明かに看取されるであらう。シュライエルマッヘルの宗教は其根柢に於て超倫理的であるが、フィヒテの宗教は其自身は超倫理的ではあるか、併し一度倫理に入つて之を超脱したものである。

斯くて宗教は、生活としては、當爲と必爲とが溶けあつて一切の乖離と葛藤とを脱した精神の根本的氣分であると言ふことが出來るが、併しフィヒテに依れば此根本的氣分は、一種の世界觀、前著に開陳されたやうな形而上學的世界觀の上に初めて成立ち得る。「形而上學……は宗教本來の樓家(エレメント)である。世界の原初より今日に至るまで

宗教は、それが如何なる形を以て現はるゝとも、常に形而上學であつた。形而上學：：を輕蔑し嘲笑する者は自己が何を爲しつゝあるかを知らざるか、若くば宗教を輕蔑し嘲笑する者である。」(S.W.,VII,S.241.) 宗教は「業に非ず、又た活動的のものにも非ず、然らずして觀(Ansicht)である。」(S.W.,VII,S.248)

斯くてイェナ期に於て「歡喜精進」と同視された宗教は此處に至つて二の方面よりして明かに唯の實行又は行動より區別さるゝに至つたのであるが、併し宗教が形而上學又は世界觀に對する關係、或は一般に生活と思惟または知識との關係は上述の說き方では尙ほ極めて不明確である。之を精細に說述したのは「淨福生活の指南」である。

フィヒテによれば生、愛、福(Leben,Liebe,Seligkeit)の三者は一に歸する。生あるところには必ず欲望があり、缺乏の感があり、吾々に滿足を與ふべき或對象と結付かんとする衝動、要するに欲望の滿足に對する衝動がある。而して此衝動の終極の目的は言ふまでもなく永續する充分なる滿足でなければならぬ。若し此永續する充分なる滿足をば淨福と呼ぶならば、生と淨福とは根柢に於ては同一である、生の概念中には已に淨福の概念を含む、從つて淨福の生活といふ語は同義語の反覆であると言へる。

尙ほ又た、其れを所有することによりて滿足を得べき對象と結付くこと、及び斯く結付かんとする衝動をば愛と呼ぶならば、生及び淨福の兩者は又た根柢に於て愛と一であるといふことも明である。吾々は吾々が滿足してある程度に於て、或は淨福である程度に於て生き、而して吾々が愛する丈けそれ丈け滿足し得るといふことが出來る。卽ちフィヒテの語を假りて「汝が愛するところのものを、其れを汝は生きる。愛は汝の生であり、汝の生の根柢、本據、及中心である。汝の內なる諸他の活動は唯此唯一中心に向ひ動く限に於て生である。」(S.W.,V.,S.403) 卽ち、生、福、愛の三者は其根柢に於て一であることが分つた。併しながら眞の生は唯一永遠なる眞在と合一したる生、或は神の內に於ける生、或は神の愛の外にはあり得ない。吾々は普通有限無常の差別の世界に滿足を求める、從つて其滿足も亦た永續的でなくして無常である。永續するものは唯一切の滿足の無常なることのみ。此刹那に一の望を懷いて滿足を求むれば次の刹那には此望は空に歸する、斯くて生は空望と失望との連續したる交代となる、卽ち眞の意味に於ける生に非ずして生死の交代、假生 Scheinleben にすぎぬ。或は不斷の死である。斯の如き狀態に伴ふ感じは福の正反對なる空虛、悲慘、不幸の感である。而して生をして斯る假生たらしむるものは實に有限無常なるものに對

する愛である。卽ち、眞の生を生きんが爲めには恒常なるものゝ愛、永遠なるもの憧憬による外はない。若し此永遠なるものを神と呼び、無常なるものゝ總體を世界と呼ぶならば、眞の生は神の愛、神に於ける生であつて、假生は世界に於ける生である。

斯くてフィヒテは淨福の生活をば生、衝動、愛、憧憬等と同視したが、是等の語の普通の用法に從へば其れは或は知又は意識的思惟の要素なくして存立し得るものゝ樣に解せられるかも知れぬ、或は少くとも狹義に於ける卽ち高級の思惟とは極めて緣遠きものゝ樣に解せられるかも知れぬが、併しフィヒテはさう考へては居ない。却て進んで淨福をば思惟と結付けた、或は寧ろ之と同視した。

フィヒテによれば、道德的行動は尙ほ缺乏、欲望、內面の乖離を伴ふが故に、感情は偶然的で恒常と判明とを缺くが故に、共に永遠者を吾がものとすることは出來ぬ。永遠者を把捉し得るは思惟のみ。殊に此期のフィヒテの思想に於ては、純粹思惟は其自身神の定有 das göttliche Dasein であり、而して逆に、神の定有は其直接性に於て純粹思惟に外ならぬ。(S.W.,V.,S.418f.) 吾々は「唯狹義の、純粹な、眞誠な思惟のみに依て、絕對的に他の機關に依らず、神及び其れより流出る淨福の生活を吾がものとし得る。」(S.W.,V.,S.418.) 斯くてフィヒテは最低級の生活と結付いた最低級の世界觀より最完成した宗敎

生活に伴ふ必然的思惟に基いた世界觀に至るまでの段階をば順を追ふて敍說して、今自らが到達した宗敎的世界觀をば、通俗、若くば先行哲學者、若くば自己の前期の世界觀と對照して其位置を明かに示さんとした。

第一の最低級の世界觀は感覺界をば其儘實在と見るものであつて、フィヒテは之を感性の立場よりの世界觀と呼んだ。第二は此感覺界をば義務の法則の顯現と見るところの、道德Sittlichkeitの立場よりの世界觀である。此世界觀に於ては道德律が唯一の實在であつて、理性的生類たる多數人格は此道德律の實現の爲め、而して感覺界は此自由人格の活動の舞臺、道具、又は材料として道德律に依て造出されたものである。此立場の最適切な實例は「實踐理性批判」に至るまでのカント哲學であつて、而して其れは又たフィヒテ自身の初期に於ける法理論及び倫理說の基礎となつて居る、といふことを彼自身自白して居る。第三はフィヒテが高級道德(höhere Moralität)と名けた立場よりの世界觀である。此世界觀に於ても法則が唯一の實在であるが、併し其法則は命令的法則でなくして創造的法則 schaffendes od. erschaffendes Gesetz である。命令的法則は唯消極的、卽ち既存の力を規正し其の間に存する反對を排除して均衡と靜和とを持來すのみのものであるが、創造的法則は積極的、卽ち斯くして、靜和の狀態に

歸したる力に生命を與へて新たなるものを創造する。此世界觀に於て眞に其自身に存ずるものは聖、善、美の理念(イデー)であつて、次は其「映像」Abbild 又は顯現たるべき人性、而して命令的法則は第三位に下り、唯人性をして此本領に適はしめんが爲め、卽ち神の映像たらしめんが爲めに之に內的外的の平和を持來す爲めの方便にすぎぬ。而して最後に感覺界は唯の行動の爲めの舞臺である。此高級道德により、之によつて靈感されたる人々を通じて初めて宗敎、殊に基督敎、哲學、科學、法律、藝術等、要するに高尙なる人文が現はれる。哲學者中に於て此立場よりの世界觀の代表者を求むれば古代に於てはプラトーンが其端を開き、現代に於てはヤコービが時に此圈域に接觸して居る。第四は宗敎又は信仰の立場よりの世界觀である。此世界觀によれば在るもの(嚴密な意味に於ける實有 Sein)は神のみ、神の外には一物も在るなし。吾々人間はその直接の顯現、感覺界はその間接の顯現、卽ち吾々の意識を介して現はれたものである。恰かも一の光が三稜鏡を通して種々の色光彩に分るゝが如く獨一の神的生命は吾々の意識を通して無數の萬象となつて現はるゝ。斯くて吾々は一なるものを多なるもの、現象の世界と見る。從つて吾々は到るところに神を見ずして唯其被相のみを見る。多樣の現象は言ふまでもなく、自然法といひ、道德法といふも畢

竟此被相にすぎぬ。併しこは唯低級の立場に對してゞあつて、吾々若し一度宗教の立場に立つならば、是等一切の被相は消滅して神は其本原的の形を以て吾々自身の生活として吾々の内に顯はれ來る。神は「聖き人が爲し、生き、愛するところのものに於て」其被相を脱して直接に現はれる。神は「彼に身を獻げ彼の靈感を受けたものが爲すところのものである。汝は神を彼自身に於てある如く面たり見んと欲するか。彼を雲の彼方に求むるなかれ。汝は汝の在るあらゆる處に彼を見出し得ん。彼に身を獻げたる者の生活に見よ、然らば汝は彼を見ん。汝自身を彼に獻げよ、然らば汝は汝の胸の中に彼を見ん。(S.W.,V.,S.472.)」これが卽ち宗教の立場よりした世界及び實有觀である。最後の最高の世界觀は學 Wissenschaft の立場よりの世界觀である。卽ち第四の世界觀にあつて唯の狀態又は事實であることの「如何にして」の認識である。第四の世界觀に對しては神的生命と人的生命との合一は絕對的事實であつた。此事實を說明し演繹する者は學である。「多樣の萬象は全然「一」に根柢を有する、而して又た之に還元さるべきであるといふ事實(dass)は、宗教が既に認めたことであるが、學は更に一歩を進めて此事實の「如何にして」の洞觀に達する。宗教に對して絕對的事實に過ぎざりしものは學に對して發生的 genetisch となる。」(S.W.,V.,S.472.) 此認

識なくしては宗教は唯の信に止まる。此認誠によつて滲透されたる宗教が觀照である。尤も、淨福生活としての宗教態は必ずしも其學的說明に依存しない。學的說明を待たずして已に不動の確實性を有する。併し此學的說明に依て此生活は初めて明亮なる確信となり、眞に神の本質に適合するやうにする。

是に於て、「實踐理性批判」に至るまでのカント、及びイェナ期に於けるフィヒテ自身の立場は第四位を占め、創造的法則としての理念を實在と見る世界觀(フィヒテは此世界觀は現代には殆んど全く知られざるものとして、前に述べたやうに、ヤコービが僅かに時々此圈域に接觸して居ると說いて居る)が第三位、而して「人間の本分」及び「現代の特徵」に於て充分明確に區別されて居ない宗教的生活よりして直接に成立つて來る神秘的體驗の世界觀と、其れの哲學的說明としての學的世界觀との區別が充分に明確にされて、前者が第二位、後者が最上位を占むるに至つた。是に於て吾々はフィヒテの宗教の二義を認めねばならぬ。前にフィヒテが眞の宗教は判明な必然的な認識と結付かねばならぬと說いた場合の宗教は第二位の世界觀と結付いたものでなくして、最上位の世界觀と結付いたものである。第二位の世界觀の根柢となつて居る所謂宗教は單に言はゞ中樞的宗教態 centrale Religiosität であつて、あらゆる方面に開展し

完成されたものではない、其れには凡ての淨福の生活、神人和合の生活と必然に伴ふところの神秘的、體驗的の認識はあるが、嚴密なる意味の、卽ち判明な思惟、必然的な知識はなく、況して神の認識と聯關して成立つところの包括的な世界認識はない。之に反して最高位の宗教はあらゆる方向に開展したる、神に於ける又た神よりしての生活であつて、而して之には必然的に、學的に精錬されたる神の認識、而して之に依つて世界の認識が屬する。而して此認識の最完成したものはフィヒテに依れば此期の「知識學」である。

フィヒテは此思想をば一八一三年の「國家論」(Staatslehre, oder über das Verhältniss des Urstaates zum Vernunftreiche. S.W., IV,S.369ff.)に於て更に明確に言表はして、一方、他より與へられたる概念的教說をば單に眞として承認するに止まるといふ意味に於ける「信仰」を排すると共に、他方、完全なる宗教に於ては宗教的生活をば「悟性」に依て照らして明確なる世界觀の形となさねばならぬことを力說して居る。而して此事はフィヒテによればカントに依て着手され、フィヒテ自身の「知識學」に依つて完成されたのである。而してフィヒテは、聖靈は基督教徒に一切を告げ彼等を凡ての眞理に導くであらうといつた耶蘇の豫言(「我なほ爾曹に多く語るべきことあれども今なんぢら曉ることを得

ず、されど彼れすなはち眞理の靈の來らんとき爾暫を導きて凡ての眞理を知らしむべし云々」―約翰傳一六の一二、三)が之に依て充たさるゝのであると說いて居る。(S.W., IV,S.570.)「基督敎は徹頭徹尾悟性の事柄 eine Sache des Verstandsである」「何よりも先きに敎說 zuvörderst Lehre」である。(S.W.,IV.,S.524ff) 斯くて本來豫言者的の素質を有し改革者的情熱に充たされたフィヒテは、イヱナ期に於て嚴密に限定し且つ實行した宗敎哲學の課題に關する制限を破つて自ら「眞宗敎」必ずしも新宗敎と言はず何となれば此學的世界觀は已に基督敎中に存じ殊に約翰福音書中に最明確は表はれて居ると彼は考へたから)の宣傳者となつた。

斯くてフィヒテによれば、眞の生活又は淨福の生活は有限無常なるものゝ愛を棄てゝ永遠者を愛するにあるのであるが、併し其れは「判明なる概念の內に神を愛しつゝ擁する」im klaren Begriffe die Gottheit liebend umfasst (S.W.,V,S.411.)ことに依て初めて成立つ。「唯最高き思惟の翱翔にのみ神は來る Nur an den höchsten Aufschwung des Denkens kommt die Gottheit 他の如何なる官能を以てするも彼は把捉されぬ。」(S.W.,V,S.411.) フィヒテが有限無常なるものゝ愛を棄てゝ永遠者を愛することに依て初めて淨福の生活に入り得ると說く點はスピノーザの「知性改修論」De Intellectus Emendatione の所說を想起さし

めるのであるが、更に淨福の生活をば「判明なる概念の内に神を愛しつゝ抱擁する」にあるとする點に於て宛然スピノーザの「神の知的愛」の復興を見るのである。但しフィヒテは其世界觀をば「學的」、「理論的」と呼び、「認識」又は「悟性」の上に立つと言つて居るが、併しそれは決して普通の意味に於て純悟性的ではない。此世界觀の採用はフィヒテに依れば宗教的轉心又は更生を經由して初めて可能である。何となれば、之に對する第一の要件はフィヒテによれば吾々の愛をば差別無常の世界よりして永遠なる「全一」に轉ずることである。吾々は一たび「世に死して」初めて世の一切は新たなる光明に照され、神の泉より流出るものとして聖化され、活々とした生命を以て更に美はしき相を以て再び吾々の眼前に現はれ來ることであらう。(S.W.,V.,S.413.)而して斯の如き體驗を經由して初めて最高の學的世界觀は成立し得る。此の如き背景を缺くならば其所謂學的世界觀は畢竟空虛なる概念の眞として承認 blosses Führwahrhalten des leeren Schaltenbegriffe に過ぎぬ。スピノーザの場合には更生は認識に基いた世界觀に依て可能であり(無論其體系に現はれた形の上に於て)、フィヒテの場合には眞の認識は一度更生の體驗を經由して初めて成立つ。此點に於ても亦カントの實踐理性優位說や更生觀等がフィヒテの思想の背景となつて居る。而して更に、斯の如く一たび

「世に死する」ことに依て成立ち得るところの世界觀は再び吾々の一切の思惟及び行動を透して「世」を改造し行くべき力とならねばならぬ。卽ちフィヒテは一八一三年の「國家論」に於て、完全なる宗教は判明なる知識と結付かねばならぬ、基督教は「悟性の事柄」にして「教說」であると明言した其「國家論」に於て、間もなく更に附加へて、「基督教は單なる「教說」ではない、其れを通して國法の原理とならねばならぬ、此世に於ても尙ほ、神が道德的活物として自由の意志及び洞觀に依て獨り且つ普ねく支配するやうにならねばならぬ。」(S.W.,IV.,S.579.)と說いて居る。卽ちフィヒテの倫理主義、努力主義、事功主義は尙ほ其靜觀主義の宗教觀中に保存されて居る。(完)

此論文は一般讀者にフィヒテの宗教哲學思想の發展を紹介せんとしたのであるが、一は予の叙說法の罪にもよるが一は題目及び目的其者の性質上豫期以上冗長となつたからAnweisung zum seligen Leben の叙說を比較的簡略して玆に完結することゝした。Anweisung zum seligen Lebenに就ては尙ほ、自己意識と神との關係、フィヒテの「歷史的」に對する考〻、之と關聯して他の同時又は直後の宗教哲學(シュライエルマッヘル、シェリング、ヘーゲル等の)との關係、彼が基督教殊にヨハネ福音書の教を如何に其體系に取入れたか、レッシングとの關係(之を說く伏線として前期に於て特にレッシングとの關係に接觸して置いたが)等重要と思ふことが殘つて居るが、是等に就ては或は機を見て書いて見やうと思ふ。予が特にフィヒテを擇んで題目としたのは、一は前にも一寸述べたやうに彼れの思想が近世歐洲思想史上に於ける種

々の代表的段階を經由して居るといふ點が興味を惹いたからであるが、一は彼れの思想が其發展の到達點に於ては神秘的、汎神論的世界觀と任運無功用の境地とを極致とする點に於て他の「ロマンティック」の思想家と同一でありながら、其出發點たるカントの嚴肅說の影響は終まで其背景として殘つて居つて、其れが終始を一貫した論理的豫想及び基調をなして居ることを示さんとするにあつた。此二つの目的は此論文に依て或程度まで達せられて居ると思ふ。唯、伯林期の思想に就ては、論理的理路と共に氣分を傳へる必要上多くの直接引用句を挿入したが、譯文の拙なる爲め其目的を達し得なかつたことを遺憾とする。

當爲の譯字を初めて試用するやうに前號には記して置いたが、本年四月の「丁酉倫理會講演集」誌上に於て桑木教授が既に用ゐられたことを內田正氏の懇切なる注意に依て後に知つた。茲に不注意を謝する。